

言語力を育成する社会科授業開発

—「解釈」の段階に「社会事象の比較」を組み込んで—

教育実践高度化専攻

授業実践リーダーコース

学籍番号：P08019A

氏名：高塚 友理子

1 問題の所在と研究の目的

子どもを取り巻く環境の変化の中で、他者との対話や豊かな言語文化体験の減少により子どもたちの言語力は低下している。平成20年版小学校学習指導要領では、国語科のみならず、各教科において「言語力」育成の必要性が述べられている。つまり、社会科において言語力を育成することは喫緊の課題である。

社会科の授業を行う際には、問いを設定し、問いを探究することで、子どもが思考し、問いに対して因果を「説明」できるようになる概念探究型社会科の授業をめざしてきた。しかし、探究の過程において、様々な資料を提示したり、記述情報を共有したりするだけでは、問いに対する「因果を説明すること」ができない児童がいる。また、資料は読み取ることができていても、問いに対する「因果の説明」に至らない場合もある。つまり、探究過程で思考した内容や、習得した記述的知識や分析的知識を結び付けたり、整理したりして問いに対する答えを導き出すことができていない。その原因は、児童が記述情報を整理して習得できていないことにある。

本研究の目的は、児童が「問い」に対する「因果を説明すること」ができる社会科授業を開発することである。そこで、言語力の育成における「記述」「解釈」「説明」「解釈・判断」を授業の中に組み込む。そして、「解釈」の段階において「記述」

の段階で読み取った記述情報を「比較」させることで、説明的知識の習得を目指す。さらに、異なる事象同士を「比較」することで、まとまっていない記述情報を整理し、問いに対する「因果の説明」ができる社会科授業の開発に取り組む。

2 実践報告書の構成

序論

第Ⅰ章 社会科における言語力

第Ⅱ章 「言語力」を育成する社会科授業

第Ⅲ章 「言語力」の育成を視点とした、先行実践の分析

第Ⅳ章 「解釈」の段階に「社会的事象の比較」を組み込んだ中学年地域学習の授業開発

第Ⅴ章 「解釈」の段階に「社会事象の比較」を組み込んだ中学年地域学習の授業モデル改善

結論

3 研究の概要

(1) 社会科における言語力

小学校学習指導要領における総則、国語科、社会科、算数科、理科の各教科や総合的な学習において求められている言語力を比較し、社会科で育成されるべき5点の言語力を抽出した。

① 作業的・体験的な学習の充実

② 問題解決的な学習の充実

- ③ 観察・調査や資料活用を通して、必要な情報を入手し的確に記録する学習
- ④ 記録したことを比較、関連付け、総合しながら再構成する学習
- ⑤ 考えたことを自分の言葉でまとめ、伝え合うことで、お互いの考えを深める学習

(2) 「言語力」を育成する社会科授業

社会科授業とは、概念探究型社会科の授業を行うことで、子どもが思考し、問いに対する「因果を説明すること」ができるようになる授業である。そして、「なぜ」という問いを探究することで社会のしくみをわかることが概念探究型社会科の目標である。この概念探究型社会科授業の中に言語力育成における「記述」「解釈」「説明」「解釈・判断」を組み込むことで、問いに対する「因果を説明すること」ができる授業をめざした。そして、「解釈」の段階に「社会事象の比較」を行うことによって、記述情報を整理し問いに対する「因果の説明」を意図した授業モデルの開発を行った。

(3) 授業の実際

本研究における実践は、実習で行った。単元「銀の馬車道から見る生野と飾磨の町の様子」では、「なぜ」疑問を設定し、「解釈」の過程で「事象間の比較」を行った。そして、「社会事象の比較」を行うことで、必要な記述情報を整理し、問いに対する「因果の説明」、すなわち説明的知識の習得を目指した。

4 成果と課題

本研究の成果と課題は、次のとおりである。

《成果》

- ① 小学校学習指導要領における総則、国語科、社会科、算数科、理科の各教科や総合的な学習に

において求められている言語力を比較し、社会科で育成されるべき言語力を抽出することができた。

- ② 米田豊の「探究Ⅰ」「探究Ⅱ」に「記述」「解釈」「説明」「解釈・判断」を位置づけることで、言語力の育成を意図した概念探究型の授業モデルを開発することができた。そして、「解釈」の段階において「社会事象の比較」を行うことが、問いに対する「因果を説明すること」に対して有用であることを明らかにすることができた。
- ③ 問いに対する「因果の説明」を意図し、「解釈」の段階に「社会事象の比較」を組み込んだ中学年社会科地域学習に授業モデルを開発した。そして、授業実践を行い、その成果と課題を明らかにし、授業モデルを改善することができた。

《課題》

- ① 「解釈」の段階において、「社会事象を比較する」だけでは、「因果を説明する」ことに至らない場合があるということである。授業モデルを開発し、実践した結果、「解釈」の段階で「社会事象の比較」を行うことは、問いに対する「因果を説明する」ために有用であることが明らかになった。しかし、いくつかの「社会事象の比較」を行った場合、比較して得た知識を「関連付ける」場面を設定しなければ「因果の説明」に至らない場合があることも明らかになった。したがって、比較によって習得した知識を「関連付ける」必要がある。
- ② 改善した授業モデルに基づいて、授業実践を行い、改善の手だての有効性を明らかにする。

修学指導教員 天根 哲治
 永田 智子
 指導教員 米田 豊